

振り返りシート（例示）

実習施設名		施設種別	生活介護（障害福祉サービス事業）	作成日	20 年 月 日
	（1 か所目・8 日間）				
実習生 名前（実習期間）					
担当教員名（備考：交代など）					

振り返りの成果（1 か所目の場合、2 か所目の実習課題の冒頭に記述する内容）
1 か所目の実習先、〇〇では、課題①「利用者を理解する」ため、利用者とのコミュニケーションの形成に注力した。初日は緊張したが、次第に多くの利用者と挨拶、趣味などについての会話、なかには少し深い悩みなども聞くことができてきた。ただし、言語でのコミュニケーションが難しい方に対してはほとんど交流ができなかった。絵や身振りなど他の伝達方法を試みるべきであった。課題②「援助者の仕事、援助の方法を学ぶ」では、指導者が、ソーシャルワーク以外の、例えば利用者の送迎やボランティアとの連絡調整など多くの仕事をしていることを知った。援助の方法では、利用者とは日常会話をしながら様々な情報を集めていることを知った。しかも笑顔を交えながらラポールの形成もしていた。それらを実習後半に試す機会があったが、私は質問が直線的で利用者の方がつまらなそうであった。指導者と代わるといろいろな話に飛びながらも多くの情報が得られた。閉じられた質問・開かれた質問の用い方、言い換え、焦点化、要約化、かわり行動、直面化についてもっと理解し技術を向上させなければならない。これが次への大きな課題である。課題③「多職種連携の実態を知る」では、支援員同士でのやりとりが多く、理学療法士が非常勤で来ていたが、見学だけに終わった。これも次への課題である。

- 本実習教育内容・実習評価ガイドラインにおいては、科目「ソーシャルワーク実習」の通知に規定されている「教育に含むべき事項①～⑩」に対応した「教育目標」を設定している。教育目標は、「達成目標」と「行動目標」で構成される。
- 「達成目標」は、実習生が実習を終えた時点において「どのような行動ができるようになっているか」を示したものであり、実習の結果としての状態を表している。達成目標の習得の深度や段階は、実習施設の種別や法人の理念等に基づき、実習前に実習担当教員と実習指導者との間で調整して設定する。
- 「行動目標」は、達成目標を細分化し、「説明できる、図示できる、実施できる、作成できる」など、より具体的かつ観察可能な行動を示している。
- ソーシャルワーク実習では、実習施設の種別を問わず、ミクロ・メゾ・マクロの全てのレベルにおいて支援（介入）の対象が存在しているため、実際に活用する際は、それぞれのレベルで想定される対象を念頭に置いた行動目標を設定する。本ガイドラインでは、「ミクロ」「メゾ」「マクロ」を以下の通り定義する。

ミクロレベル：直接援助の対象である個人と家族への介入。

メゾレベル：家族ほど親密ではないが、グループや学校・職場、近隣など有意義な対人関係があるレベルで、クライアントに直接、影響するシステムの変容をめざす介入。

マクロレベル：対面での直接サービス提供ではなく、社会問題に対応するための社会計画や地域組織化。

- なお、教育に含むべき事項①～⑩の項目配列の順序は実習過程の順序を示したものではないため、実習施設・機関および実習生の状況に合わせ、各項目を関連付けて目標を達成するための実習計画を立案する。
- ★以下の例示は複数の実習先のものを提示している。

厚労省通知 「ソーシャルワーク実習」		ソーシャルワーク実習の教育目標・達成状況	
ねらい	教育に含むべき事項	達成目標	達成状況（細分化された達成目標、すなわち行動目標ごとに達成できたことを振り返り、記述する。日誌から該当箇所をコピーしてもよい）
①ソーシャルワークの実践に必要な各科目の知識と技術を統合し、社会福祉士としての価値と倫理に基づく支援を行うための実践能力を養う。 ②支援を必要とする人や地域の状況を理解し、その生活上の課題（ニーズ）について把握する。 ③生活上の課題（ニーズ）に対応するため、支援を必要とする人の内的資源やフォーマル・インフォーマルな社会資源を活用した支援計画の作成、実施及びその評価を行う。	①利用者やその関係者（家族・親族、友人等）、施設・事業者・機関・団体、住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや円滑な人間関係の形成	(1)クライアント等と人間関係を形成するための基本的なコミュニケーションをとることができる	★利用者の理解を深めるためには、日常生活に密接にかかわり、彼らの物語を聞くことが不可欠である。生活支援コーディネーターの方と訪問した際、用件から入らず、話していくうちに、健康状態のほか、自然とほしい情報を聞き出せていた。 ★クライアントの話に傾聴の態度で耳を傾け、安心して話せる雰囲気をつくることを意識した。表情や態度から相手の気持ちを汲み取ろうとする工夫も少しずつ実践できた。今後は沈黙にも丁寧に寄り添えるよう、さらにコミュニケーション力を磨きたい。
	②利用者やその関係者（家族・親族、友人等）との援助関係の形成	(2)クライアント等との援助関係を形成することができる	★利用者の中には、認知症などを伝えることに躊躇する、しかしひとり歩きや交通事故が心配だ、と思う人がいる。浦添ニュータウンは勾配がひどく路駐が多い。夫の認知症を話すことをためらっている方がヤクルトの配達員に伝えたところ、遠くで見つけた経験があり、今では悩みを共有できる地域となった。 ★限られた実習期間の中で、傾聴や共感的な対応を意識しながらラポール形成に努めた。相手のニーズを捉えようとする中で、関係の深まりを感じることもあったが、深い援助関係の構築はできなかったように感じる。
	③利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題（ニーズ）の把握、支援計画の作成と実施及び評価	(3)クライアント、グループ、地域住民等のアセスメントを実施し、ニーズを明確にすることができる	★観察や聞き取りを通じて、クライアントのニーズを整理・把握することができた。しかし、時間的制約により表面的なニーズにとどまってしまったように感じる。深層的なニーズへの理解のため、支援の方向性を深めるには継続的な関わりが必要だと感じた。

④施設・機関等が地域社会の中で果たす役割を実践的に理解する。

⑤総合的かつ包括的な支援における多職種・多機関、地域住民等との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。

	(4) 地域アセスメントを実施 し、地域の課題や問題解決に向けた目標を設定することができる	★ ○○村では地域ケア会議を地域包括支援センターが中心となって運営しており、特別養護老人ホーム職員の参加は明記されていない。地域・医療・福祉の連携や支援の質の向上のために、地域ケア会議への特別養護老人ホーム職員の参加の明記が、○○村の今後の課題ではないかと考察した。
	(5) 各種計画の様式を使用して計画を作成・策定 及び実施することができる	★ケアプラン第2表の様式を用いて、課題整理と支援内容の構造化を経験することができた。 しかし、短期・長期目標の設定においては、自分一人では根拠をもった判断をすることが難しく、専門的な視点の必要性を強く感じた。
	(6) 各種計画の実施をモニタリング および評価することができる	★作成したケアプランのうちの1つである、「いろいろな曲を聞く頻度を増やして楽しさを増やしたい」というニーズの中の、サービス内容の1つ、「音楽療法の参加」に関するモニタリングを行った。ケアプラン対象者のKさんは、リクエスト曲を質問された際は、拒む場面が見られたが、手拍子や合唱を行ったりするなど、楽しく参加しているように見えたので、継続して次のプランに導入しても良いのではないかと総合評価をつけた。
④ 利用者 やその関係者（家族・親族、友人等）への 権利擁護活動 とその評価	(7) クライアントおよび多様な人々の権利擁護ならびに エンパワメントを含む実践 を行い、評価することができる	★施設や職員の権利擁護活動については、理解することができ、自分でも、自己決定権の尊重を意識して対応するなど、少しではあるが、権利擁護を含む実践を行った。 一方で、ストレングスの視点からクライアントの持つ力を十分に把握することができず、エンパワメントにつなげる関わりが不十分だったと感じた。
⑤ 多職種連携及びチームアプローチ の実践的理解	(8) 実習施設・機関等の 各職種の機能と役割を説明 することができる	★管理栄養士は、お客様一人一人のカロリーやアレルギーを理解し、個別対応を行っている。 ★ケア会議で、弁護士が同席し、施設と協力して、家族に対するアセスメント、発言をし易くするようにしていた。 他に、福祉事務所にも行った。
	(9) 実習施設・機関等と 関係する社会資源の機能と役割を説明 することができる	★クリニックが終末期医療を重視し、看取りケアに関する方針を持っていることを理解できた。
	(10) 地域住民、関係者、 関係機関等と連携・協働 することができる	★行っていない
	(11) 各種会議を企画・運営 することができる	★模擬的なサービス担当者会議を運営した。参加者は援助員、自分、実習指導者の3名に限られていたが、資料準備や議題整理、進行役としての立場を意識して取り組んだ。しかし、本来は訓練士・看護師・ケアマネジャーなど、多職種が参加すべき会議であり、限られた構成では十分な実践とは言えなかった。
⑥ 当該実習先が地域社会の中で果たす役割の理解及び具体的な地域社会への働きかけ	(12) 地域社会における実習施設・機関等の役割を説明 することができる	★地域のセーフティーネットとして実習施設が位置している。 ★地域包括センター「△△」が、多くの人と人、社会資源同士を結びつけていることを学んだ。「□□」では、地域コミュニティの場を作り、高齢者を一人にさせない町づくりを行い、介護予防を実践していた。
	(13) 地域住民や団体、施設、機関等に働きかける	行っていない。

⑦地域における分野横断的・業種横断的な関係形成と社会資源の活用・調整・開発に関する理解	(14) 地域における分野横断的・業種横断的な社会資源について説明し、問題解決への活用や新たな開発を検討することができる。	★介護タクシーに関しては、介護保険負担限度額認定制度などの助成制度の対象外である。今回入所申し込みをした方が、介護タクシーを利用する際は、福島県〇〇荘からA病院まで往復で7、8千円が、家族の自己負担となり、負担が大きい。△△村の高齢者人口の割合は、25.39%のため、現在だけでなく、今後も介護タクシーを利用する人数が多くなることが予想される。介護タクシーの需要が多くあるのにも関わらず、料金が高いというのは、供給が追いついていないといえる。介護タクシーの料金の見直し、地域の課題ではないかと考えた。 ★〇〇市では、ラインを利用した「見守りタグ」をシステム化している。また、〇〇市と市内の全包括支援センターが参加する連絡会があり、高齢者率、津波の際の高齢者の動きなどについて、情報などを共有していた。「□□」では、高齢者と子どもの触れ合いなどがあった。
⑧施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際（チームマネジメントや人材管理の理解を含む。）	(15) 実習施設・機関等の経営理念や戦略を分析に基づいて説明することができる	★〇〇荘では、利用者のことを、利用者ではなく、お客様と呼ぶことに統一していた。その理由は、サービス業と同じようなイメージで、呼び方を「お客様」とする方が、丁寧な対応が可能になり、個人の要望を取り入れやすいという考えがあるからだそう。個別化を意識したケアにつながるよう、呼び方にも配慮されているのだと考察した。
	(16) 実習施設・機関等の法的根拠、財政、運営方法を説明することができる	★特別養護老人ホームは、老人福祉法第5条の3より、日常生活を営むための施設として位置づけられている。
⑨社会福祉士としての職業倫理と組織の一員としての役割と責任の理解	(17) 実習施設・機関等における社会福祉士の倫理に基づいた実践及びジレンマの解決を適切に行うことができる	★根本的な解決が不可能であり、本人の要望に沿った対応ができないこの問題は、クライアントの利益の最優先と生存権のジレンマであると考えた。ジレンマに対しては、優先順位を付けて判断を行い、特性を理解して、どのような対策をとるか考えることが大切であるとのことだった。ジレンマが生じた場面に気づくことはできたが、実践を行う機会はなかった。注力したい。
	(18) 実習施設・機関等の規則等について説明することができる	★職員が遵守すべき事項のひとつである、虐待防止策には自己チェック表が設けられており、自己流の対応からエラーにつながることを防いでおり、人間の心理に基づかれた防止策が講じられていると感じた。

	⑩ソーシャルワーク実践に求められる以下の技術の実践的理解 ・アウトリーチ ・ネットワーク ・コーディネーション ・ネゴシエーション ・ファシリテーション ・プレゼンテーション ・ソーシャルアクション	(19)以下の技術について目的、方法、留意点について説明することができる ・アウトリーチ ・ネットワーク ・コーディネーション ・ネゴシエーション ・ファシリテーション ・プレゼンテーション ・ソーシャルアクション	★アウトリーチでは、指導者と同行し、引きこもり気味の高齢者の自宅を訪問した。 ★アウトリーチでは、フレイル体操の会を実施した。8名の参加があり、男性も2人参加していた。 ★ネゴシエーションでは、実習指導者（地域包括支援センター 社会福祉士）が、ゴミ屋敷の住民に対して、路上に出ている所有物の撤去を促した。そのため、〇〇社会福祉協議会、市役所道路行政担当者、ゴミ集積業者、近隣住民などと、粘り強く交渉をしていた。 ★ネットワークでは、〇〇市と市内の全包括支援センターが参加する連絡会で情報共有があった。 ★コーディネーションでは、家族と施設と弁護士を交えての話し合いの中で、地域包括支援センターの職員は家族が話しやすいようしていた。 ★ネゴシエーションでは 福祉サービスを拒む高齢者に対して、実習指導者がどのように対象者と関係を構築し、どのようなタイミングでネゴシエーションを進めているのかを観察した。 ★アウトリーチでは、フレイル体操の会を実施した。8名の参加があり、男性も2人参加していた。 ★ネゴシエーションでは、実習指導者（地域包括支援センター 社会福祉士）が、ゴミ屋敷の住民に対して、路上に出ている所有物の撤去を促した。そのため、〇〇社会福祉協議会、市役所道路行政担当者、ゴミ集積業者、近隣住民などと、粘り強く交渉をしていた。 ★ファシリテーションは、サービス担当者会議のなかで、「実現可能でしょうか」など質問をして援助員が話しやすいようにした。 ★ファシリテーション は行っていない。 ★プレゼンテーションは、最終日に学んだことをまとめて発表した。 ★ソーシャルアクションについては、浦添でのラインを利用した「見守りタグ」をシステム化したことが該当すると説明を受けた。 ●これらの項目については、「ソーシャルワーク実習」のテキストなどをよく読んで、実習中のどのような事象が該当するか、よく検討しておく。
--	--	--	---